

# 絶滅危惧の48種確認

## 「宮崎の自然と環境」第5号で報告

自然・環境の研究者や愛好者らでつくる宮崎の自然と環境協会（岩本俊孝会長）がこのほど、会員向けの冊子「宮崎の自然と環境」の第5号（A4判96ページ）を発行した。

冊子には、動植物や地質などさまざまな分野で調査・研究を続ける会員が、その成果や現状などを投稿。専門的な内容をカラー写真や図表を使って分かりやすく紹介している。

このうち、宮崎大学大学院農学研究科の前田恵未さん、高千穂森の会の興梠幸男会長、宮崎大農学部西脇亜也教授の3人は、高千穂町の鳥屋岳で確認したキレンゲシヨウマ、クマガイソウなど絶滅危惧の植物種について報告している。

同町押方の鳥屋岳は、興梠会長が所有・管理する約8畝のスイギ人工林が野生動植物の重要生息地に指定されている。一昨年から昨年にかけて調査したところ、絶滅危惧の植物48種類を確認したという。

前田さんら3人は「下刈り管理が木本（もくほん）の成長を阻害し、草本（そうほん）主体のレッドリスト植物種に有利となった可能性がある」と考察。「今後調査を継続すればさらに多くのレッドリスト植物種が確認されると思われる」と結んでいる。

宮崎の自然と環境協会の岩本会長は「鳥屋岳は祖母・傾・大崩エネスコエコパークで生物多様性の高いスポットに選定されており、貴重な資料となる。今後の調査研究に期待したい」と話していた。

この他、2017年10月に串間市で確認された県内初記録のアカイセエビ、宮崎市の一ツ瀬川河口で14年から毎年越冬しているカラフトワシに関する報告なども掲載されている。

同協会は、県内の自然や環境に関する分野横断的な発表の場をつくり、豊かな環境の保全につなげようと16年7月に発足した。冊子に関する問い合わせは岩本会長（☎090・2089・9977）。



「宮崎の自然と環境」第5号

# 稚アユ、出荷作業ピーク

日向市

## あゆの是則 生育順調、県内外へ

日向市幸脇の養殖業者「あゆの是則（このり）」（是則由員社長）で、人工ふ化させた稚アユの出荷が始まった。月上旬まで続き、出荷量は西日本屈指の約600万匹を見込んでいる。県内外で養殖用や放流用として使われるという。

地約40坪からくみ上げた海水を利用し、耳川流域にある養殖場で稚アユを生産。門川

産の成魚から採った卵を9月上旬にふ化させ、約60日間

で重さ約0・4gまで育てた後、淡水の別の水槽に移し替え、約2週間の間育成を経て

重さ約0・7g、体長約5・6センチ育ったものを出荷する。人工ふ化させた稚アユは天然より3カ月ほどサイクルが早く、海産稚アユ漁の解禁前に市場へ安定出荷できるメリットがあるほか、天然資源の保護の観点から需要は年々高まっているという。

出荷作業は同市美々津町のいけすで昨年末から始まり、今がピーク。けさもスタッフが専用の網で稚アユをいけすから次々とすくい上げ、4トトラックの水槽へ100キ（約14万匹）の稚アユを移す作業を繰り返していた。

是則社長（71）は「コロナ禍で大変だが、今年も生育は順調。天然資源の保護に貢献しながら、皆さんから喜んでもらえる健康で良質な強い稚アユを生産していきたい」と話した。

出荷する稚アユをいけすからすくい上げるスタッフ（けさ、日向市美々津町）



同社は難しいとされる稚アユの養殖で、全国でも有数の業者として知られており、民間では九州唯一。生産した稚アユは県内をはじめ、九州や四国の各県、和歌山県や三重県、長野県、静岡県など主に県外へ出荷される。